

# 奢摩他と未至定<sup>(1)</sup>

田中裕成

〔抄録〕

『俱舍論』では奢摩他を説明する際に心一境性が取り上げられ、奢摩他の本義である「心の寂靜」にまつわる捨 (upekṣā) の性質に言及しない。そこで、本稿では静慮の法相を紐解き、『俱舍論』における奢摩他の成就是未至定の獲得が意図され、奢摩他の特徴である寂靜性は「捨」という未至定の特徴として付与されていることを明らかにした。その上で説一切有部の修行体系の源泉が「四天道経」の四静慮説に有り、有部の断惑論との整合性のために経典に説かれない未至定という階位を設定した可能性を提示した。

キーワード 四禅、奢摩他、止観、捨、未至定

## 1. はじめに

有部の修行体系とは一言で言えば止観（奢摩他 śamatha, と毘鉢舍那 vipaśyanā）である。奢摩他は、寂靜や平靜といった意味で、毘鉢舍那は観察や分析といった意味である。つまり、心を平静にして、観察を行うというのが止観という修行体系である。一方で『俱舍論』では奢摩他は三昧や心一境性と密接な関係があるものとして説かれ<sup>(2)</sup>、寂靜や平靜といった捨 (upekṣā) のような奢摩他本来の性質は直接的に明示されない。そこで本稿では『俱舍論』における静慮に関する法相を紐解き、奢摩他の本質がどのように修行体系に組み込まれているのか。また、そのルーツはどこにあるのかを明らかにしたい。

## 2. 初期経典に見られる奢摩他の用例

『俱舍論』の検討に先立って、初期経典に見られる奢摩他の用例を確認したい。初期経典には奢摩他の語が広く確認されるが、今は最古層とされる『スッタニパータ』における奢摩他の用例を見てみたい<sup>(3)</sup>。『スッタニパータ』には二例の用例が確認される<sup>(4)</sup>。次の通りである。

Sn 67

vipiṭṭhikatvāna sukhaṃ dukhañ ca  
pubbe va ca somanadomanassaṃ,  
laddhān' upekhaṃ samathaṃ visuddhaṃ  
eko care khaggavisāṇakappo.

楽と苦と、かつての喜びと不快とを離れて、  
清浄で、静寂（samatha）である、無関心（捨）を手に入れ、一人、犀の様に歩め。

Sn 731-2

yaṃ kiñci dukkhaṃ sambhoti, sabbhaṃ saṃkhārapaccayā,  
saṃkhārānaṃ nirodhena n' atthi dukkhassa sambhavo.  
etaṃ ādinavaṃ ñatvā 'dukkhaṃ saṃkhārapaccayā'  
sabbasaṃkhārasamathā saññāya uparodhanā  
evaṃ dukkhakkhayaṃ hoti, etaṃ ñatvā yathātathaṃ.

生起する苦は、何であれ、すべては諸行を縁とすることにより〔生起する〕。諸行の滅によって、苦の生起は存在しない。(731)

諸行を縁とすることにより苦が〔生起する〕、というこの災いを知って、あらゆる諸行が静寂（samatha）である故に、想を滅する故に、このように、苦の滅尽がある。このことを如実に知って、… (732)

さて、このうち、前者（Sn 67）の用例では、奢摩他（samatha）は楽や苦を離れることによって獲得される状態（いわゆる不苦不楽受）として表現される。また、その際に外境に対する無関心さ<sup>(5)</sup>や、心の中立的状態を意味する捨（upe(k)khā m.c.）と併記して用いられることから、ここでの奢摩他は苦や楽や外境といった様々なものから離れた無関心の状態であることが見て取れよう<sup>(6)</sup>。

次に、後者（Sn 731-732）の用例では、Sn 731で流転分として示された「諸行の滅（nirodha）」に対する還滅分として「あらゆる諸行の寂静」と表現される。そしてそれは苦の滅尽、いわゆる涅槃の境地の原因でもあると説明される。こちらは寂滅（śanti）のような涅槃の境地を示していると言えよう<sup>(7)</sup>。

両者で扱われていた奢摩他は程度の違いこそあれ、いずれも、苦等から離れた心を表現している。つまり、『スッタニパータ』の用例からは、奢摩他とは、苦等から心が離れ、平静な状態、寂静な状態を意味する語として用いられていることが確認できる。

### 3. 『俱舍論』における奢摩他の自性

次に、『俱舍論』では奢摩他はどのようなものとして理解されているのか確認してみたい。『俱舍論』では二甘露門（数息観と不浄観）を奢摩他とみなす。そこで、二甘露門の記述では奢摩他がどのようなものとして理解されているのか確認したい。

AKBh 341, 7-9

ukte dve avatāramukhe. tābhyāṃ tu samādhiṃ labdhvā<sup>(8)</sup>

**niṣpannaśamathaḥ kuryāt smṛtyupasthānabhāvanām. (VI, 14ab)**

vipaśyanāyāḥ saṃpādanārtham.

〔以上で、〕二つの入門が説かれた。また、これら〔不浄観・入出息念の〕二つによって、三昧を獲得しているので、

**奢摩他を完成した者は念住の修習を行うべきである。(VI, 14ab)**

毘婆舍那の完成の為に。

ここでは、本頌で奢摩他を完成したものは、四念住を行うべきと説き、長行において、奢摩他の完成とは「二甘露門による三昧の獲得」と説明される。つまり、奢摩他とは三昧の獲得であると言える。

では、ここでの三昧とはどのようなものであろうか。アビダルマでは三昧といえば心所法の一つに数えられ、『俱舍論』の根品では次のように説かれている。

AKBh 54, 17-18

**vedanā cetanā saṃjñā cchandaḥ sparśo matiḥ smṛtiḥ.**

**manaskāro 'dhimokṣaś ca samādhiḥ sarvacetasi. (II, 24)**

ime kila daśa dharmāḥ sarvatra cittakṣaṇe samagrā bhavanti.

**受、思、想、欲、触、慧、念、作意、勝解、三昧はあらゆる心においてある。(II, 24)**

これら十法はあらゆる心刹那において、そろって存在すると、伝説する<sup>(9)</sup>。

AKBh 54, 23-24

samādhiś cittasyaikāgratā.

三昧は心の一極集中性（心一境性）である。

ここでは三昧はあらゆる心にある法、すなわち大地法であり、その性質は「心の一極集中性」であると述べる。しかし、この心所法としての三昧は大地法であるゆえに一切心に存在す

る。つまり、奢摩他の前にも後にも等しく存在するのである。では、何故、奢摩他は三昧の獲得であると言うのであろうか。

『俱舍論』の定品では禪定の階位を区分する四静慮について次のように述べる<sup>(10)</sup>。

AKBh 432, 14-16

samāpattidhyānaṃ tu vaktavyam.

ata ucyate,

**samāpattiḥ śubhaikāgyraṃ. (VIII, 1c)**

abhedena kuśalacittaikāgratā dhyānam. samādhisvabhāvatvāt.

しかし、等至静慮は説かれるべきである。というので、〔次のように〕説かれる。

**等至〔静慮〕とは、清らかな一極集中である。(VIII, 1c)**

静慮は〔四つを〕区別せずに、善心による一極集中性（心一境性）である。〔静慮は〕三昧を自性とするからである。

ここでは、等至静慮（生まれではなく入定によって獲得される静慮）は善心俱生の三昧であると示される。このことから、二甘露門によって成就される三昧とは、大地法の三昧を意図したのではなく、善の三昧として表現される静慮が意図されていることが想像される。

#### 4. 依地の分析

奢摩他と静慮と関係性は、二甘露門と四善根の依地の関係からも見て取れる。まず、二甘露門ではそれぞれの依地を次のように規定する。

AKBh 338, 22-23

yathākramam.

**alobho daśabhūḥ kāmadrśyālabhā nṛjā 'śubhā. (VI. 11cd)**

alobhasvabhāvā daśabhūmikā sasāmantakadhyānāntareṣu caturṣu dhyāneṣu kāmadhātau ca.

順番通りに、

**不浄〔観〕は（１）無貪であり、（２）十地であり、（３）欲界所見を所縁とし、（４）人〔趣〕に生じる。(VI. 11cd)**

〔不浄観は〕（１）無貪を自性とする。（２）十地に属する。〔すなわち、〕近分〔定〕・中間〔定〕を伴う四静慮と欲界とに属する。

AKBh 339, 5-7

**ānāpānasmṛtiḥ prajñā pañcabhūr vāyugocarā.**

**kāmāśrayā (VI, 12abc)**

…中略…pañcasu bhūmisu triṣu sāmantakeṣu dhyānāntare kāmādhātau copekṣāsaṃprayogitvāt.

**入出息念は、慧であり、五地であり、風を対象とし、**

**欲〔界〕を所依とする。(VI, 12abc)**

…中略…五地に属する、〔すなわち、〕三つの近分〔静慮〕と、中間静慮と、欲界に属する。捨と相応する性質の故である。

不浄観は欲界・四静慮・四近分定・中間定の十地を依地とすると説き、数息観は欲界・三近分定・中間定の五地<sup>(11)</sup>を依地とすると説く。ここでは両者ともに欲界を依地として含む点に注目したい。つまり、両者は欲界の依地を認めるため、散地（非禪定状態）での修習が想定されている。

つづいて、二甘露門の次に行う四念住の依地について見てみたい。『俱舍論』では四念住を説く際に自性について述べるものの、依地や依身等の諸門分別が行われない。しかし、続く四善根位の説示の後に諸門分別が行われる。四念住と四善根は別々の階位として捉えられることが多いが、ともに自性は四念住であり、慧である<sup>(12)</sup>。そこで、四念住の依地を見るべく、四善根の依地についての記述を見てみたい。次の通りである。

AKBh 346, 9-10

**anāgamyāntaradhyānabhūmikam. (VI, 20cd)**

anāgamyam dhyānāntaram catvāri ca dhyānāny asya bhūmis tatsaṃgrhītatvāt.

**未至・中間・静慮地に属する (VI, 20cd)**

そ〔の順決択分〕の地は未至〔定〕・中間〔定〕・四静慮である。〔順決択分は〕そ〔の地〕に含まれるからである。

ここでは四善根（四念住）の依地は未至定（第一静慮の近分定）・中間静慮・四静慮（根本定）の六地と規定される。先程の二甘露門の依地と変わり、欲界を依地に含まず、最も下地を未至定（第一静慮の近分定）とする。これら両者の記述から二甘露門において欲界（散地）から未至定（定地）に入り、続く四念住では未至定（定地）に入った状態で修行が開始することが読み取れる。このことを踏まえれば、奢摩他の成就とは未至定の成就であるといえよう。つまり、先の検討によって明らかとなった善性の三昧である静慮とは未至定である。

## 5. 未至定の位置付け

では、何故、奢摩他により成就される静慮は根本静慮ではなく未至定（第一静慮の近分定）なのであろうか。その点を探るべく、定品の静慮（根本定）の獲得に関する規定を見てみたい<sup>(13)</sup>。次の通りである。

AKBh 442, 17-20

atha śuddhakādināṃ dhyānārupyāṇāṃ kathāṃ lābhāḥ.

**atadvān labhate śuddhaṃ vairāgyeṇopapattitaḥ. (VIII, 14ab)**

asamanvāgatas tena śuddhakaṃ dhyānam ārupyaṃ vā pratilabhate, adhobhūmivairāgyād vā, adhobhūmyupapattito vā.

さて、浄（善）等の静慮と無色〔定〕はどのように獲得するのか。

**そ〔の浄静慮〕を有さない者が、離染によって、〔あるいは〕生の故に、浄〔静慮〕を獲得する。(VIII, 14ab)**

そ〔の浄静慮〕を具足していない者が、浄なる静慮、あるいは〔浄なる〕無色〔定〕を獲得する。下地から離染するゆえに、あるいは、下〔地〕に生まれる故にである。

ここでは浄静慮、いわゆる善性の根本静慮の獲得には二種類あると述べる。すなわち、上地から下地に下生する場合（生得によって得られる静慮）と、下地の煩惱を断ずる場合（加行得によって得られる静慮）である。つまり、修行によって根本静慮を得ようとするれば、獲得予定の下地の煩惱の断が必要になる。しかし、二甘露門の内、数息観は真実作意であるため煩惱を断じうる可能性があるものの、不浄観は勝解作意であるため、煩惱を断じることができない。

AKBh 338, 1-2

adhimuktiṣikāmanaskāratvād aśubhayā na kleśaprahāṇam, viṣkambhaṇam tu.

勝解〔作意〕にして、部分作意である性質の故に、不浄〔観〕によって煩惱の断は無い。しかし、〔煩惱の〕抑制はある。

『俱舍論』において不浄観と数息観は二甘露門として、機根の違いによって選択できる等価値の修行として設定されている。仮に二甘露門による煩惱の断が修行の必須事項であれば、不浄観を選択した人々が修行を達成し得なくなってしまう。このことから二甘露門を用いた煩惱の断による第一静慮（根本定）の到達は修行過程の必須条項として想定されていないといえよう。

では、煩惱を断じていない者は禅定の境地に入れないのであろうか。この問題を解決するの

が近分定である。続いて近分定の法相を見てみたい。次のように規定される。

AKBh VIII, 447,18-448, 7

kati punaḥ sāmantakāni.

**aṣṭau sāmantakāny eṣāṃ (VIII, 22a)**

ekaikasyaikaikaṃ yena tatpraveśaḥ. kiṃ tāny api trividhāni tathaiva ca teṣu vedanā.  
nety ucyate.

**śuddhāduḥkhāsukhāni hi. (VIII, 22b)**

śuddhakāni ca tāny upekṣendriyasamprayuktāni ca yantabāhyatvād adhobhūmyudvegā-  
napagamāt vairāgyapathatvāc ca nāsvādanāsamprayuktāni.

**āryaṃ cādyam. (VIII, 22c)**

ādyam sāmantakam anāgamyam tacchuddhakaṃ cānāsravam ca yady api sāmantakacit-  
tena pratisamḍhibandhaḥ kliṣṭo bhavati. samāhitasya tu kliṣṭatvam pratiṣidhyate.

【問】さて、どれだけが近分であるか。

**【答】これら〔根本定〕には八つの近分がある。(VIII, 22a)**

一つ一つ〔の根本静慮〕に、一つ一つ〔の近分静慮〕がある。そ〔の近分〕によって、そ  
〔の根本静慮〕に入るのである。【問】それら〔近分〕も、〔根本静慮と同様に〕三種であ  
り、それら〔近分静慮〕における受は〔根本静慮と〕まったく同様であるのか。【答】そ  
うではない。というので、〔次のように〕述べた。

**浄であり、不苦不楽である。(VIII, 22b)**

それら〔近分静慮〕は浄であり、捨根と相応する。〔すなわち、根本定獲得のために〕努  
力を伴うゆえに、下地の恐れから脱してないゆえにである。離染の道であるゆえに、〔近  
分静慮は〕味と相応するのではない。

**そして、初は聖である。(VIII, 22c)**

初〔静慮〕の近分が未至〔定〕である。こ〔の未至定〕は浄と、無漏とである。もし、近  
分の心による結生があれば、染汚となる場合、定心の染汚性が否定される。

ここでは、近分定は根本静慮に付随する階位であり、いずれも浄等至（善性の静慮地）であ  
り、階位に関係なく捨（不苦不楽）という性質であると説明される。近分定の獲得方法につい  
ては一切説明されないが、近分定の特徴として、根本定獲得のため努力する階位であり、下地  
の恐れが未だ存在する階位であると説明される<sup>(14)</sup>。つまり、近分定は根本定（下地の離染の果  
報）を獲得する途中の状態であり、未だ下地の煩惱を断じていなくても、根本定の一部の果報  
を先取りできる状態であることが読み取れる。つまり、近分定は煩惱の断を必要とせずに享受  
することができる法相的に都合の良い境地である。このことから、未至定（第一静慮の近分

定)は二甘露門の修習によって獲得できる境地として適切な境地であるといえよう。また、当該の近分定の記述で注目すべき点がさらに二点存在する。まず、第一の点は第二静慮以上の近分定は淨等至のみであるが、未至定(第一静慮の近分定)のみは無漏等至(無漏性の静慮地、無漏地)を認める点である。四念住四善根の修習の後、無漏智による四諦現観は第一静慮の無漏地を依地とするが、近分定の特例はこの法相と呼応する<sup>(15)</sup>。第二の点はこの近分定はいずれも捨と相応するものとして性質が説明される点である。本論冒頭部で、『スッタニパータ』において奢摩他は苦等から心が離れて平静な状態であるが、『俱舍論』ではそのような性質が奢摩他に見いだせないことを確認した。しかし近分定という観点からは未至定は捨と相応すると規定され、ここに奢摩他性が見いだせるのである。つまり、『俱舍論』修行体系における奢摩他の成就とは捨の性質を有する未至定の獲得が意図されているといえよう。

## 6. 未至定の成立背景

先の検討では奢摩他の成就が何を意図しているのか探った。その結果、奢摩他の成就とは根本静慮とは異なる「未至定(第一静慮の近分定)」という特殊な静慮地が意図されていることが明らかとなった。しかしこの「未至定」や「近分定」は經典に登場しない概念であり<sup>(16)</sup>、これらの導入によって静慮の理論は複雑になっているといえよう。では、このような複雑な理論を設定する必要はどこにあったのであろうか。それを探るべく四静慮について見てみたい。

さて、四静慮にはそれぞれに特徴となる支分があり、『俱舍論』ではそれを取り上げ、十八静慮支<sup>(17)</sup>や静慮の十一事<sup>(18)</sup>として分析する。これらはいずれも四静慮の定型句を分析したものである。四静慮の定型句は様々な経や論に見られるが、有部では『法蘊論』の第十一「静慮品」所引の經典(以下、「四天道経」と呼称する)がよく用いられる。そこで、今はそれを見てみたい。次の通りである。

『法蘊論』静慮品第十一之一 [T.26.482a26-b9<sup>(19)</sup>]

一時薄伽梵、在室羅筏、住逝多林給孤獨園。爾時世尊。告苾芻衆。有四天道。令諸有情、未淨者淨。淨者鮮白。何等爲四。

謂有一類。離欲惡不善法、有尋有伺、離生喜樂、初靜慮具足住。是名第一天道。

復有一類。尋伺寂靜、内等淨、心一趣性、無尋無伺、定生喜樂、第二靜慮具足住。是名第二天道。

復有一類。離喜住捨、正念正知、身受樂聖說應捨、第三靜慮具足住。是名第三天道。

復有一類。斷樂斷苦、先喜憂沒、不苦不樂、捨念清淨、第四靜慮具足住。是名第四天道。如是四種。皆令有情、未淨者淨。淨者鮮白。

ある時、世尊は舍衛城の祇樹給孤獨園に居た。その時、世尊は比丘たちに〔次のように〕

述べた。四天道がある。〔それは〕諸々の有情を、清らかでなければ清らかにし、清らかであれば更に清らかにする。何を四つとするかといえは〔、次の通りである〕。

【第一】欲・悪・不善の法を離れ、有尋有伺にして、離によって生じる喜樂があり、初静慮を具え、住まう或る者がいる。彼を第一天道という。

【第二】尋伺を静め、内面が清浄であり、心の一極集中性を有し、無尋無伺であり、定生の喜樂があり、第二静慮を具え、住まう或る者がいる。彼を第二天道という。

【第三】喜を離れ、捨に住まい、正念・正知があり、聖者達が捨てるべきであると説く身体の樂を受け、第三静慮を具え、住まう或る者がいる。彼を第三天道という。

【第四】樂を断じ、苦を断じ、喜や憂は絶たれ、不苦不樂にして、捨と念が清浄であり、第四静慮を具え、住まう或る者がいる。彼を第四天道という。

以上の四種は諸々の有情を、清らかでなければ清らかにし、清らかであれば更に清かにするものである。

この四静慮の説示であるが、先入観に囚われずに読めば、心身の捨を成就する四つの過程として読むことができる。まず、第一では、尋伺がある状態で、世間的な悪いものから離れ、離れたことを喜ぶ。第二では尋伺を離れ、心の一極集中という定に入り、その定を喜ぶ。第三ではそのような喜びからも離れ、心を捨の状態に置き、正念正智があり、禅定による身体の安樂が存在する。第四では身体の安樂も捨て去り、心と身体を完全な捨の状態とする。通常、敎理化された仏敎一般の理解において四静慮はすべて定地とされる。しかし、当該箇所を読む限りは、第一に定の性質である心の一極集中性は無く、第二からしか存在しない。さらに第二では入定の喜びが存在する。つまり第一は本来定地では無く、散地（入定していない状態）であった可能性が見いだせる<sup>(20)</sup>。あくまで、第一は欲悪不善を離れること、つまり、修行に不適切な環境から離れることが意図されたものであり、第一で少欲知足となり、五蓋を離れ、修行に相応しい器となり、第二で入定し、心一境性を備える。そして第三では入定した状態で捨（奢摩他）と正念・正知（毘鉢舍那）によって正しく観察する（止観）。そして、第四では、完全な捨と念を備える（解脱）<sup>(21)</sup>。このように見れば、四静慮とは、すべてが禅定の境地や断惑の果報ではなく、第一静慮で戒、第二静慮で定、第三静慮で慧、第四静慮で解脱といった戒定慧解脱の修行段階を示したものであると見ることができよう。このような理解は、『法蘊論』の当該箇所の注釈からも読み取れる。次の通りである。

『法蘊論』 [T.26.482b10-12]

離欲悪不善法者。云何欲。謂貪亦名欲。欲界亦名欲。五妙欲境亦名欲。今此義中、意說五妙欲境名欲。

「欲・悪・不善法を離れ」というが、【問】欲とは何か。【答】（1）貪を欲という。（2）

欲界を欲という。(3) 五妙欲を欲という。【評説】今は、これらの意味のうち、五妙欲の境界を名付けて欲という。

『法蘊論』 [T.26.483a4-5]

云何悪不善法。謂五蓋。即貪欲蓋、瞋恚蓋、昏沈睡眠蓋、掉舉惡作蓋、疑蓋。

【問】 悪不善の法とは何か 【答】 五蓋である。〔すなわち、〕 貪欲蓋、瞋恚蓋、昏沈睡眠蓋、掉舉惡作蓋、疑蓋、である。

ここでは第一天道（第一静慮）の「欲・悪・不善法より離れる」との記述は、五妙欲や五蓋からの遠離と理解されていることが見て取れる。つまり、第一静慮は欲望の対象から離れ、定を妨げる五蓋を断ずるといった入定のために必要な修行が意図されているといえよう。

しかし、より一層進んだ法相を有する《婆沙論》では同箇所を注釈する際に、『法蘊論』と異なる立場が示される。次の通りである。

『新婆沙』 [T.27.415a23-26<sup>(22)</sup>]

離欲悪不善法者。問得初静慮時總離欲界一切法。何故但説離欲悪不善法耶。答悪不善法以爲上首。總離欲界故作是説。

「欲・悪・不善の法を離れて」とは、【問】 問う。初静慮を得る時、すべからく欲界の一切法を離れる。何故、〔仏は〕「欲・悪・不善の法を離れ」とのみ説いたのか。【答】 答える。〔欲界法は〕 悪・不善の法を上首とする。すべからく、欲界を離れるゆえに、この〔上首のみが〕 説かれた。

ここでは、『法蘊論』と解釈内容が変わり、第一天道（第一静慮）の「欲・悪・不善法より離れて」との記述は、「すべからく、欲界を離れること」とであると注釈が施される。これは『俱舍論』で見られた法相のように第一静慮は欲界繫法の離染を前提とするという立場と対応する。つまり、本来、第一静慮は入定や欲界繫離染を前提としたものではなかったが、法相の発展によって第一静慮は入定や欲界繫離染を前提としたものへと変わっていったといえよう。

では、この変遷はどのような理由によるのであろうか。おそらくは、「五蓋を離れる」ということを法相的に消化した結果、このような形に変化したのではないだろうか。何故ならば、入定の前提としてよく登場する五蓋という徳目はその自性を法相的に分析すれば欲界繫の貪瞋などの煩惱である<sup>(23)</sup>。つまり、五蓋から離れるということは厳密に言えば欲界繫の煩惱の断にほかならない。有部では修行体系を整備する際に、欲界繫の煩惱の断は原則として見道と修道に基づくと規定した。その結果、五蓋を離れるためには欲界繫の煩惱の断が必要となった。このことから、第一静慮は欲界繫の煩惱の断が前提となり、第一静慮等は欲界離染によって獲得

される境地と規定されるに至ったと考えられよう。

先の仮説では、本来の第一静慮は修行の準備である「戒」(欲から離れ五蓋を離れる)であり、第二静慮は観察の準備である「定」(心を一点に集中する)であり、第三静慮は観察である「慧」(心を捨の状態にし、正念正智がある)であり、第四静慮は捨と念の完成である「解脱」であるという、可能性を提示した。このような四静慮に示される修行体系の順序は、現行の『俱舍論』の修行順序と対応する。第一は身器清浄・四聖種、第二は奢摩他である二甘露門、第三は毘鉢舍那である四念住、第四は解脱の境地である無学である。しかし、経文に基づけば、慧の修行(四念住)に相当する第三静慮の正念正智は「捨」と対応するのだが、断惑論の整備の結果、根本静慮の獲得に下地の離染が必要となったため、第三静慮と第四静慮支分の「捨」は有漏位である四念住の際には獲得できなくなってしまった。それを解消するのが未至定(第一静慮の近分定)である。この未至定は不苦不楽にして捨相応であると特別に規定される。そして、先の検討で明らかになったように奢摩他の成就によって獲得される静慮地は他でもなく未至定である。つまり、奢摩他の成就によって未至定の獲得、すなわち、捨の獲得があり、その捨を有する未至定の境地(奢摩他)において四念住(毘鉢舍那)が実践されるのである。すなわち、本来の第三静慮(捨と正念正智)こそが止観(奢摩他・毘鉢舍那)であり、断惑理論の徹底による静慮の離染化によって、再構築された止観が、未至定(捨相応=奢摩他)を依地とする四念住(正念正智=毘鉢舍那)といえよう。つまり、有部が經典に説かれていない未至定を新たに設定したのは、断惑理論の徹底による静慮の離染化によって、捨と相応する第三静慮が離染の果報となってしまったために、第三静慮の代わりに離染前の状態で捨を獲得する必要があったからだといえよう。だからこそ、第一静慮の根本定は捨相応でないのに、第一静慮の近分定である未至定には第三静慮の根本定の特徴である捨相応という果報が設定されたのではないだろうか。いずれにせよ、説一切有部では未至定という法相を新たに設定することで、様々な法相的問題の解決を図っているといえよう<sup>(24)</sup>。

## 7. まとめ

以上、本稿では二甘露門によって獲得される奢摩他について分析を行った。その結果、数息観や不浄観といった二甘露門によって成就される奢摩他とは、未至定であり、「捨」相応のゆえに奢摩他であることを明らかにした。明らかとなった点を整理すれば次の通りである。

1. 『スッタニパータ』では奢摩他は苦楽等から心が離れて平静な状態(捨)である。
2. 二甘露門による奢摩他の成就とは、善なる三昧(静慮)の獲得である。
3. 二甘露門は欲界と未至定を共通の依地とし、続く四念住では未至定より上地の六地を依地とする。このことから、二甘露門によって成就される奢摩他という善なる三

- 昧（静慮）は未至定である。
4. 奢摩他の成就が未至定（第一静慮の近分定）であるのは次の四つの理由が挙げられる。
    - a. 根本静慮の獲得には下地の離染が必要であり、二甘露門によって獲得できない。
    - b. 未至定は下地の離染が不必要であり、定地性や捨といった静慮地の果報を先取りできる。
    - c. 近分定の中で未至定のみ無漏等至が想定されており、現観の前行として適切。
    - d. 未至定等の近分定に奢摩他の奢摩他たる性質である「捨」が相応する。
  5. 経典に説かれない未至定（第一静慮の近分定）を有部が設定した背景には、「四天道経」と断惑論の整備が推測される。
    - a. 説一切有部の修行道は四天道（四静慮）の教義と対応し、第一天道は身器清浄（戒）、第二天道は心一境性（定）、第三天道は止観（慧）、第四天道は無漏の境地（解脱）と呼応する。
    - b. 第一天道（第一静慮）は本来禅定の準備階位（散地）であったが、断惑論の整備の結果、五蓋を断ずるために無漏智が必要になり、第一静慮が離欲後の果報（定地）に繰り上がった。結果、第一天道の所断の欲が「五妙欲」から「欲界」へと再解釈された。
    - c. 止観は第三天道における捨と正念正智の対応を模倣したものであったが、静慮地が断惑の果報になってしまったため、欲界を依地とする修行者が第三天道（第三静慮）の捨を成就することができなくなってしまった。そこでそれを補うために、欲界繫の身で離染を必要とせず享受する定地として未至定が設定され、そこに捨の特性が付与された。

〔略号〕

- AKBh: *Abhidharma Kośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Reserch Institute, 1967.
- AKVy: *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*. Ed. Unrai Wogihara. Sankibo Buddhist Book Store, 1989.
- Sn: *Suttanipāta*, London : Pali Text Society 1913.
- T.: 大正新脩大蔵経

〔参考文献〕

- K.R. Norman [2005] *The Group of Discourses (Sutta-Nipāta) (2nd Edition)*, Pali Text Society.
- 荒牧典俊, 本庄良文, 榎本文雄 [2015] 『スッタニパータ [釈尊のことば] 全現代語訳』, 講談社.
- 池田練太郎 [1992] 「色界第四禪について」『印仏研』, 40-2, pp. 966-961.
- 小谷信千代 [2000] 『法と行の思想としての仏教』, 平楽寺書店.
- 小谷信千代・本庄良文 [2004]

- 『俱舍論の原典研究 智品・定品』, 大蔵出版.
- 小谷信千代・本庄良文 [2007] 『俱舍論の原典研究 随眠品』, 大蔵出版.
- 吉瀬勝 [1973] 「八等至について」, 『花園大学研究紀要』 4, pp. 27-52.
- 吉瀬勝 [1974] 「阿毘達磨順正理論における禪定の問題」, 『禅文化研究所紀要』 6, pp. 17-28.
- 金児黙存 [1957] 「四禅説の形成とその構造」, 『名古屋大学文学部研究論集: 哲学』 18, pp. 123-144.
- 金亨俊 [1997] 『原始仏教における禪定思想の研究』, 博士論文 (佛教大学)
- 雲井昭善 [1976] 「禪定と三昧」, 『仏教学セミナー』 23, pp. 1-23(R).
- 櫻部建・小谷信千代 [1999] 『俱舍論の原典解明 賢聖品』, 法蔵館.
- 清水俊史 [2015] 「説一切有部における有漏世間道による断惑」, 『真宗文化』 24号, pp. 17-44.
- 修山脩一 [1955] 「禪定の研究」, 『佐賀龍谷学会紀要』 3, pp. 1-68(L).
- 田中教照 [1993] 『初期仏教の修行道論』, 山喜房佛書林.
- 中村元 [1974] 「原始仏教における止観」『印仏研』 23-1, pp. 24-29.
- 中村元 [1975] 「原始仏教における止観」『止観の研究』, pp. 35-50(R).
- 中村元 [1984] 『ブッダのことば スッタニパータ』, 岩波書店.
- 並川孝儀 [2021] 「最古層經典における sata, sati の用法」, 『仏教学部論集』 105.
- 花木泰堅 [1965] 「禪定道の考察」, 『日本仏教学会年報』 30, pp. 131-146.
- 藤田宏達 [1972] 「原始仏教における禪定思想」, 『仏教思想論叢: 佐藤博士古希記念』, pp. 297-315(L).
- 増永靈鳳 [1944] 『禪定思想史: 禪定思想とその展開』, 日本評論社.
- 水野和彦 [2020] 「四善根位の定についての一考察」, 『印仏研』 68-2, pp. 106-110(L).
- 村上真完 [1985] 『仏のことば註 (一)』, 春秋社.
- 村上真完 [1988] 『仏のことば註 (三)』, 春秋社.
- 村上明宏 [2018] 「定静慮 (dhyāna-samāpatti) に関する問題」, 『印仏研』 66-2, pp. 112-115(L).
- 村上明宏 [2019] 「説一切有部の等至の体系における静慮の重視」, 『佛教経済研究』 48, pp. 19-40(L).

〔注〕

- (1) 本内容は2020年7月3日に開催された部派仏教研究会第十二回会合にて「奢摩他と近分定」として発表したものに若干の加筆と修正を加えたものである。研究会においては多くの参加者から貴重な意見を頂戴した。ここに記して謝意を示す。
- (2) 『俱舍論』修行体系における奢摩他と心一境性の関係については、2020年2月2日に開催された部派仏教研究会第十回会合 (於国際仏教学大学院大学) にて『『俱舍論』の不浄観』として発表をすでに行った。発表内容に若干の加筆と修正を加えた別稿を準備している。詳細はそちらを参照されたい。
- (3) 初期經典における奢摩他の用例や内容に関しては中村 [1974, 1975] に詳しい。
- (4) 翻訳の際には Norman [2005] 及び、荒牧他 [2015]、中村 [1984] を参照した。
- (5) upekkhā に関して、並川 [2021, p.13] は sati と upekha の関係を説明する際に、upekha は「無関心なども訳せ、外界に惑わされることのない心の平静な状態を示す」と説明する。今はその理解に基づいて、このように解釈した。
- (6) Sn 67 について、Norman [2001, p. 8] は samatha と visuddhi を upekha の説明として、having gained equanimity [which is] purified calmness と翻訳する。また、荒牧他 [2015, pp. 29-30] は upekha と visuddhi を samatha の形容詞として理解し、「いまや平静の極みにあって、清浄なるままに静止した「定」を体得している」と翻訳する。また、中村 [1984] は samatha と upe-

kha の二つを獲得すると理解し、「清らかな平静と安らいを得て」と翻訳する。また、ブッダゴーサの註釈（Cf. 村上 [1985, pp. 264-265]）に基づけば、ブッダゴーサは当該偈頌を第四静慮の境地の説明と理解し、ここでの upekhā は第四静慮の捨であり、samatha は第四静慮の寂靜、visuddha は五蓋、尋、伺、喜、樂といった静慮にまつわる煩悩を全て離れていることであると説明する。また、ブッダゴーサは、苦樂は肉体的な感受作用であり、喜びと不快は精神的な感受作用であると区別する。

- (7) Sn 732 の sabbasaṃkhārasamathā であるが、Norman [2001, p. 96]では、は the quiescence of all constituent elements と翻訳され、荒牧他 [2015, p. 187] では、「一切の形成作用がおさまることにより」と翻訳される。中村 [1984] は「一切の潜在的形能力が消滅し」と翻訳する。また、ブッダゴーサの註釈（Cf. 村上 [pp. 511-512]）によれば、ブッダゴーサはここでの諸行は福業、非福業、不動業であり、一切諸行の寂靜とは、それら諸業が道智によって鎮められ、その結果、諸行が果報を齎さなくなることで説明する。
- (8) samādhim labdhvā n niṣpa-] *em.* samādhilabdā niṣpa- MS. Pradhan. Cf. Tib. ting nge 'dzin thop nas. この訂正は本庄先生のご教示に基づく、記して謝意を示す。
- (9) 当該の伝説の語は、世親が大地法十法を認めず、『五蘊論』に説かれるような五遍行、五別境という二系統から十法を理解することに基づく。Cf. AKVy 127, 20-22.
- (10) 『俱舍論』以外の説一切有部の関連記述に関しては村上明宏 [2019] に詳しい。
- (11) 不淨觀と数息觀で依地が十地と五地で異なるのは、捨と氣息の有無による規定である。すなわち、数息觀は樂を有し、捨に相反することから三種の根本静慮には数息觀が無いとの規定と、第四の根本定と近分定には吸気と呼気が存在しないとの規定から、五地（三種の根本定と、第四の根本定と近分定）が除かれている。ただ、これらの規定については異説が存在する。Cf. AKBh 229, 10-13.
- (12) 四善根の自性は念住であり慧であると『俱舍論』では説明される。  
AKBh 345, 67  
ta eta uṣmagatādayaḥ smṛtyupasthānasvabhāvatvāt prajñātmakā ucyante.  
まさにこれら煖等は念住を自性とする故に、慧が自性であると言われる。
- (13) 煩悩の断における静慮の働きについては、清水 [2015] の論考が最も有益である。清水 [2015] は有漏世間道における断惑について整理した研究である。その際に異生が定地を得る際に、近分定が適用されていることを紹介する。ただ、清水 [2015] ではこの近分定が正規の修行方法の際にも重要な働きを有することは言及しない。そこで本稿ではその点について注目し、詳細を述べたい。
- (14) 「下地の恐れから脱していないから」という理由句について称友は捨相応と関係付ける解釈に加え、味と相応しないことと関係付ける解釈を紹介する。今は前者の形で理解した。Cf. AKVy 681, 27-682, 3.
- (15) 換言すれば、第一静慮の近分定を依地とする修行者が無漏智を起こし、淨等至を無漏等至に変換して現觀を行っていると言えよう。また、この法相の傍証として、『瑜伽師地論』には未至定の者が現觀したときに第一静慮の喜根が生起するののかについての吟味があり、少なくとも『瑜伽師地論』では行者は未至定を依地として現觀することが認められている。  
『瑜伽師地論』 [T. 30.618b14-17]  
問若補特伽羅依未至定修諦現觀。彼得果時起初靜慮喜根現前。爲不起耶。答有一能起。有一不起。若有利根衆多善本之所資助。彼能現起。非餘。
- (16) 未至定 (anāgāmya) や近分定 (sāmantaka) は管見の限り、經典に対応句を見出すことができなかった。論書においては、『法蘊足論』に最も古い未至定の用例が確認でき（ただし、信憑性には問題がある。記述の信憑性については末注24を参照）、また、『發智論』以後一般的な用例として広く確認でき、有部阿毘達磨論論書以外であっても『瑜伽師地論』や無着の作品に広く確認することができる。

- (17) 十八静慮支とは、四静慮それぞれの持つ特性を述べたものである。『俱舍論』定品 (AKBh437, 13-438, 9) では、次の通りである。第一静慮の五支 (尋、伺、喜、楽、三昧 (心一境性))、第二静慮の四支 (内清浄、喜、楽、三昧 (心一境性))、第三静慮の五支 (捨、念、正智、楽、三昧 (心安住))、第四静慮の四支 (不苦不楽、捨、念、三昧)
- (18) 十八静慮支は実質的なものとしては十一事にまとめられる。『俱舍論』定品 (AKBh438, 9) では、次の通りである。第一静慮の五事 (尋、伺、喜、楽、三昧 (心一境性))、第二静慮では一事 (内清浄) が追加、第三静慮では四事 (捨、念、正智、楽) が追加され、第四静慮の一事 (不苦不楽受) が追加される。
- (19) 四静慮を説示する近似する経典は多く存在するが、管見の限り、『法蘊足論』と細かく対応する経典は阿含ニカヤ中に見いだせなかった。その一方で、『婆沙論』では『法蘊足論』と同一の経典が引用される。
- (20) また、このような第一静慮が本来、定性を欠如していたことに関しては、『俱舍論』定品では、静慮支分の説明に際して、第一静慮に本来なかった定性を追加して、問題の回避を試みていることから確認できる。詳細は十八静慮支及び末注17を参照。
- (21) 池田 [1992] は『婆沙論』の検討を通して、第一静慮より第三静慮は人間の思惟行動が意図されている一方で、第四静慮が精神の活動の停止した死の境地に近いものとして区別されていることを指摘している。
- (22) 対応する諸本については次の通りである。
- 『鞞婆沙』 [T.28.488a2-4]  
問曰。如離一切欲界。何以故世尊但説離欲惡不善法。答曰。世尊已説離欲惡不善法。當知已説離一切欲界。  
【問】 問う。もし、〔初静慮が〕 一切の欲界を離れるのであれば、どうして世尊はただ、「欲・悪・不善法を離れ」とのみ説いたのか。【答】 答える。世尊が「欲・悪・不善を離れ」と説かれたのは、「一切欲界を離れる」と説かれた〔ことにほかならない〕と知るべきである。
- 『旧婆沙』 [T.28.311b07-9]  
云何四種天道。如比丘離欲惡不善法。乃至廣説。問曰。盡離欲界法。何故佛但説離欲惡不善法耶。答曰。如佛説離欲惡不善法。當知已説盡離欲界法。  
「何が四天道か、たとえば比丘が悪不善法を離れて」云々と、【問】 問う。〔第一天道は〕 悉く欲界法を離れるのに、なぜ仏は、「欲惡不善法を離れて」とのみ説いたのか。【答】 答える。仏が説いた通りである。「欲惡不善法を離れて」とは、〔仏によって〕 欲界の法を離れることであると説かれたと知るべきである。
- (23) 五蓋は欲貪蓋、瞋恚蓋、惛沈睡眠蓋、掉挙悪作蓋、疑蓋の五つである。『俱舍論』では、これらは欲界繫の煩惱であると説明される。(AKBh 318, 7-12)
- (24) 『法蘊足論』の四天道積が断惑論整備以前の古い形である可能性を指摘した。しかしその一方で、『法蘊足論』内部には発展した断惑論の片鱗が指摘され、未至定に関しても『法蘊足論』では、捨根、不苦不楽受、捨界の記述の第二説として三箇所を確認することができる。
- 『法蘊足論』 [T.26.0499b21] (Cf. 不苦不楽受 [T.26.501a21-27]、捨界 [T.26.504b17-21])  
云何捨根。謂順捨觸所生身捨心捨。非平等非不平等受。受所攝。是名捨根。復次脩未至定静慮中間第四静慮。及無色定。順不苦不楽觸所生心捨。非平等非不平等受。受所攝。是名捨根。この二つの説示の内、第一説は『集異門足論』の三受の不苦不楽受の規定に由来する記述であると考えられる。
- 『集異門足論』 [T.26.384b12-14]  
不苦不楽受云何。答順不苦不楽受觸所生身捨心捨非平等非不平等受受所攝。是謂不苦不楽受。この『集異門足論』に由来する第一説は「捨」や「不苦不楽受」を説明する定型句となり、『界身足論』 [T.26.615b20-22] や『品類論』 [T.26.700c17-19, 723b08-9]、『新婆沙』 [27.732c4-6] に登場する。しかし、いずれにおいても第二説は一切登場しない。一方で、『新婆沙』では捨根相

応地の定型句として第二説に近似するものが確認される。

『新婆沙』[T.27.0558c4-5, c10-11]

能除一切色貪者。…中略…或捨根相應。謂在未至定靜慮中間第四靜慮。

『新婆沙』[T.27.0558c12-13, c17-19]

能除一切無色貪者。…中略…或捨根相應。謂在未至定靜慮中間第四靜慮及前三無色。

このことから、『法蘊足論』で三度登場する「未至定」の語を含んだ捨や不苦不樂受の説明は、『品類論』等よりも後に『新婆沙』の記述に基づいて『法蘊足論』に加筆された可能性を見出すことができる。仮にそうであれば、筆者の仮説とも呼応する。

〔付記〕

令和4年度科学研究費〔22K12974〕及び〔21K19969〕による研究成果の一部である。

（たなか ひろのり 仏教学部非常勤講師）  
2022年11月15日受理